

消化不良損塾・横須賀市レクリエーション指導研究会

オーバーナイト・ウォーク実践活動報告

よこすかしこいわし（岸正晴 横須賀市レク指導研究会・会長）

（横須賀遊名人協会・師笑）

キーワード「知的仕掛け」

I 横須賀市レクリエーション指導研究会（横須賀遊名人協会）の歩み

「横須賀を知らない人はいないでしょうね」なんて思うのは、ヨコスカに住んでる人だけでしょうな。戦時中は海軍のイメージ、今は米軍のイメージってところですか。確かにアメリカ人は多いね。でも43万人の横須賀市民全員が、英会話ができるってほど、多くはございません。

神奈川県は南東、三浦半島の中ほどを占め、東は東京湾、西は相模湾と海にも囲まれ、また開発はされましたがまだ緑濃く残っている丘陵部もあり、東京横浜方面からも緑と海を求めてドライブやピクニックと洒落込むヤングやファミリーもあるって所です。

さて、レクリエーション指導者が徒党を組みまして「横須賀市レクリエーション指導研究会」なるものを結成したのが、かれこれ12年前。横須賀ばかりでなく、回りの三浦・葉山・逗子なども活動のエリアにいれ、三浦半島域でのレクリエーション普及のため、基本的には「偉大な日本レクリエーション協会」が公認してくださるレクリエーション指導者を中心に活動を始めたのであります。

さればでござる、レクリエーション指導者養成講座、遊びクリエイター講座、ニュー・スポーツ普及、キャンプ講習会、福祉レクリエーション講座、学校レクリエーション講習会、遊びと保育研究などを通して、指導者養成を行うとともに、市民レクリエーション大会、福祉オリエンテーリング、ウォークラリー大会、ファミリーキャンプ、マイソングマイコンサートなどなど市民を対象とするイベントも得意であります。

しかしながら、会員の基本が「レクリエーション指導者」とかそれを目指す者であること、また会の名称そのものも「レク指導研究会」という超前時代的な名称ですから、発足の当初から会員は60から70名ってところ。大勢のそそっかしい人が、私どもの会を体験し、そして育っていきました。と言うとかっこいいけど、正直言うとあきれ果ててやめていきましたと言うところでしょうか。現在も会員として活動している仲間は、並はずれた根性の持ち主、個性ある人物と言うんでしょうな。

「決してがんばらない」「遊びながらやる」「自分が楽しめなくちゃレクじゃない」とか言いつつも、「できるかできないかの問題ではなく、やる気があるかどうかの問題だ」とか、「たといドブの中でも良い、前のめりになって死んでいたい」なんて言ったかと思うと「遊気をもって週遊二日」「衣・食・住遊」なんて訳のわからないことを言う人間が多いもんだから、メンバーは消化不良をおこして、会員であることで「得」することより、「損」することの方が多く、「消化不良損塾」と悪口をたたかれる始末。

“船橋自遊人協会”の如く、レクリエーションとかレク指導者とかをかなぐり捨てて、組織のコンセプトを変えちまう必要を感じていない訳ではないのですが、組織の長って

のはダメだね、今の組織に不満を持ちながらも、不安を抱え、その立場に甘えちゃうんだ。それに多くの市民を巻き込むことは大切なことだが、会員が多いから良いと言う訳でもありません。本当にゆかいでさわやかなスタッフが、それぞれのイベントにひとかかえもいりゃ、活動をするには十分って訳ですから。

したがって、当会は「会員は増やしたい、でも増えない」を懲りずに12年も繰り返してきたって訳です。考えてみればよく飽きないね。

だがしかし、当会の前身は実におもしろかった。「横須賀市レク指導研究会」を襲名する前、約10年ほどの活動でしたが「横須賀野外活動研究会」って言いましてね、わずか20名ほどの組織でしたが、実に封建的で、前近代的な職人集団。もちろんキャンプ指導から、オリエンテーリング、野外活動と言いながら室内レク、お座敷ゲームまでこなすレク・ボランティア組織ですが、徒弟制度まであった組織でしたな。入会したくてもなかなか入れてもらえない。正会員に一生懸命まわりついて、「ばしり」を続け、やる気やレク技術をその人に認めてもらった上で、その正会員に紹介会員になってもらうんですが、例会に出席を許されても発言はできず、最後の議題が終わって初めて、紹介会員から「私が紹介するからには私が責任を持ちますので、ぜひ入会を認めてやって下さい」とあり、全員に承認されてやっと会員になれるという、なんともすごい組織でしたな。入会できて1年ぐらいい、幹部に直接発言することは許されず、一度紹介会員に発言をして、それを伝えてもらうという江戸城にあるようなレク組織でしたな。けどドマア、レクの企画や指導活動、他人の面倒見、ボランティア精神など、どれをとっても最高の人たちのが集まってましたな。

この排他的で閉鎖的な連中が、12年前に突然「会費さえ払えば、あなたもお友達！」をコンセプトに「横須賀市レク指導研究会」になったんだから、すごい変身だね。市レク協会加盟団体だが、いまだに行政には応援援助ももらえない自主独立型の組織。

II 10周年記念イベント“オーバー・ナイト・ウォーキング”

ともあれ、その後10年間の活動を積み重ね、その運動のノウハウを活かしつつ「10年だからなんかいつもと違うイベントをやってみんなべよ」と企画したのが「オーバーナイト・ウォーク」でございました。三浦半島とは言っても、横須賀がベースの活動エリア「横須賀のはずれからはずれまで、夜っぴて歩こう」が最初のイベントコンセプト。企画と言えばかっこはいいけど、活動アイデアのほとんどはレク講習会や例会などの後、必ず決まって行く焼き鳥屋の酒の上でございませうから、「それいいんじゃない。俺、歩く人をサポートするための車に乗っていく。」「私は夜食の買い出し」「チェック・ポイントの要員をやりたい」てな訳でして、誰一人として「俺は歩く、参加者と同じように夜通し歩いてみようじゃない」という輩はございません。

ちょうどその頃起きたのが奥尻を中心にした「北海道南西沖地震」。どうせ参加費を集めるのなら、全額それを寄付に回させてもらったらどうだろう。歩く人たちは30人ぐらいだろうから、そのサポート経費は、会の財源でどうにかしよう。それから徹夜で歩くなら、そのままゴールの海岸で仮寝をしてから、ついでに10周年記念バーベキューパーティーってのはどうだってんで、その夜の内にほとんどが決まってしまった。

だけど遊ぶためのエネルギーってのは、すごいね。救急組から、バーベキュー組、朝

方ゴールしてから仮寝する人の場所確保組とどんどん決まって行くのですから。

さて今回のイベント仕掛けのキーは寄付金の募り方にごさいます。「参加費を寄付金に回しますので、一人 500円をいただきます」じゃ、味もそっけもない。寄付する方だって、大人のテレもありますな。だいいち遊びを仕掛けておいて、その参加者に「地震被災者は苦勞しているので寄付を！」なんてのは、呼びかける方もチト恥ずかしい。でもあつしらは遊び人集団、街頭に立って寄付を募っても誰もふりむいてくれやしない。結局、被災者の方々には大変失礼ですが、私らのもっとも得意とする「遊びながら〇〇をする」という方法で、しかもテレずに寄付してもらえる方法を考えてのです。

「奥尻の方々の苦勞は、私たちの想像のつくものではないことは明確ですが、夜通し歩く苦勞を重ねて、少しでも援助できたらと思います。」をコンセプトに、寄付したくたって簡単にはできないよ、苦勞しなくちゃ、「1キロ歩いたら、50円の寄付ができる」というルールにしました。横浜市との境を夜11時スタートして、市の南東部野比海岸までの約20km、5時間程度の行程ですが、歩いた距離に応じて寄付ができる訳です。参加者募集のパンフレットには、

ルール1 死んではいけない。

ルール2 完歩できたら、完歩記念として 500円寄付できます。

ルール3 残念ながら完歩できなかった人は、歩いた距離1キロにつき50円の寄付ができます。

また「奥尻の方々を思い、夜通し歩く皆さんのため、当研究会のわずかな財力から精いっぱい応援と、自分の遊びをそっちのけにしてボランティアに励む人材を投入して、サポートいたします」のメッセージも添えました。

なんだかんだと言いながら、イベント開催までのスタッフは大変です。実際にコースを昼歩いて、交通安全施設を確認したり、真夜中に何度も歩いて、ジュースを提供するところ、夜食を提供するところ、暴走族の集まる場所などを確認していきます。でもイベントを数多経験してくると、この準備活動ってのが楽しくて仕方がないんだね。

さてDMで案内をして、申し込んできたのは1週間前で、30数名。保険に加入してから、真夜中まとまって歩くには良い人数だなと思ったのはその日まででしたね。4、5日前あたりになると、三大新聞から、ローカル新聞、FM・NHK、TV神奈川などが「歩いた距離で寄付額が決まるオーバーナイト・ウォーク」と案内してくれたため、おかげでわが家の電話は鳴りっぱなし。ご丁寧にも当日の朝に放送してくれるラジオ局も。

結局、その日スタート会場に集まってきたのは、300名近く。集合会場は、夜中だと言うのにお祭り騒ぎ。TV局もやってきて朝までいっしょに歩いて30分の番組を作るんだと。スタートすれば、歩道を歩く一般の人もおどろいて避難する始末。チェックポイントではトイレが数珠つなぎ。しかしイベント慣れしているスタッフの動きはすごい。サポート車両には、トイレトペーパーから掃除用具まで積み込んである。全員無事通過の確認の後には、周辺はもちろんトイレ掃除までやってのけるからすごい。中には自宅近くのチェックポイントだけを手伝って、参加者の通過を確認してから寝に帰るおばさんスタッフもいる。ネットワークそのものの強みを感じてしまいます。

苦勞したのが、夜食ポイント。最初は「30人ぐらいなら、参加者といっしょにラーメンでも作ろう」だったが、この参加者人数ではどうも無理。パンとジュースを提供す

ることにしたが、パンが集まらない。車でコンビニをかけずり回って、やっと間に合わせる状況。この夜、横須賀中のコンビニではパンはすべて売り切れとも。

参加者の3割ぐらゐは途中リタイアではないかと予測していましたが、実際には7名だけ。そのほとんどは、朝早く出かけなければならないからと言う理由でした。リタイアすることをサポート車両に告げ、そこまでの距離を計算してもらって寄付して帰る、それも大変さわやかな光景でした。

朝4時30分にはほぼ全員の285人が無事ゴール。ゴールの海岸には、30人は眠れるテントもサポート隊が設置していたが、参加者は夜明けの海岸を満喫、始発の電車を待って帰宅しました。

結局このイベントで集まった寄付金は、188,500円。みんなが気持ち良くゴールで寄付してくれました。

さてこれだけで終われば、スタッフの20数名は皆万々歳。しかしイベントはそれほど甘くないのが夜の常。当研究会からの持ち出し金額は莫大です。休憩ポイントで提供するジュース類や夜食など、参加者のサポート経費は全て研究会持ち出しですから。確かに久しぶりに楽しくも緊張感のあるイベントではありましたが。

こんな企画を言い出したのは誰だったんだとか、おとなしく自分達だけで歩けばいいのにプレスにニュースリリースしたのは誰だとか、サポートのあいつの動きがにぶい、など侃々諤々、喧々囂々。参加者には十分楽しんでいただいたにもかかわらず、企画をしてきた裏方全員は、今回も消化不良を経験したのであります。

その後のバーベキューパーティーのビールの消費量には、恐ろしいものがありました。

III レクリエーション・イベントには「知的要素」を！

バブル経済のはじけてしまった頃から、「イベントが最高！」みたいな雰囲気はなくなっていました。楽しいイベントを企画しようなんて、いつも脳天気なこと言ってるのは私たちレクリエーション指導者だけかもしれません。人々の欲求が、ものニーズから精神的なニーズにシフトしていったように、私たちの企画するイベントは、楽しさを提供するだけのイベントでは集客するパワーはなくなってきました。もちろん楽しさは基本的な条件ですが、市民がイベントを選択して参加する時代、レクリエーションイベントには、多くの仕掛けが必要となっています。

またこれからのイベントになくてはならない要素のひとつに「知的要素」があります。「ものから心へ」のシフトは、「ものから人へ」にほかなりません。そしてそれは「ものから智慧へ」と言うことなのです。根に知的な要素がないとこれからのイベントはダメかもしれません。知的な雰囲気のあるイベントが、地域づくり、コミュニティづくりへ、市民の参加意欲を醸成していくことになるのです。

私も役目柄、いろんなイベントに参加することが多いのですが、気持ちの良いイベントには、とても良い雰囲気がありますね。「楽しみだ」という人が集まることによってかもし出される「楽しそうな」雰囲気、どこからどのようにしたらこの雰囲気は来るのだろうと思うのですが。そんなイベントをこれからも地域で繰り広げていきたいと思えます。皆さんがんばりましょう。いやがんばっちゃいけないのが、本研究会のモットー。それではいい加減にやりましょう。そしてイベントでは良い弁当を食べましょう。